ISSN 1346-3802

尚美学園大学総合政策研究紀要　第 35 号

BULLETIN OF POLICY MANAGEMENT SHOBI UNIVERSITY No.35

研究ノート｜Research Note

用法基盤モデルに基づいた第二言語語彙習得の分析
―日本人英語学習者にみられる *want* を伴う構文に基づいて―

A Usage-Based Analysis of L2 Lexical Learning: Evidence Using *Want* in Sentence Constructions by Japanese Learners of English

深谷　修代

FUKAYA, Nobuyo

尚美学園大学

総合政策学部

Shobi University

2020 年 3 月

Mar.2020

用法基盤モデルに基づいた第二言語語彙習得の分析
―日本人英語学習者にみられる *want* を伴う構文に基づいて―

A Usage-Based Analysis of L2 Lexical Learning: Evidence Using *Want* in Sentence Constructions by Japanese Learners of English

深谷　修代
FUKAYA, Nobuyo

［要約］
本論文では、日本人の英語学習者が書いた *want* を伴う文に焦点を当てて分析をする。実験のデータを見ると、実験参加者の中には英語の文法としては非文法的な「want to 名詞」(*I want to a dog*)というパターンを使用していることが分かった。そして、日本人の英語学習者は習得過程で、「want to」は一つの単位を構成しているが、その後ろには動詞が要求されるといった範疇が指定されていない段階を通過することが示唆される。本論文では、Tomasello (2003)によって提唱された用法基盤モデルを第二言語習得に適用することを試みる。そして、なぜ「want to 名詞」が可能なのかを解明していく。

キーワード：用法基盤モデル、第二言語習得、構文

[Abstract]
This paper investigates English sentences with *want* written by Japanese learners of English. The data show that some of the learners produced an ungrammatical pattern, *want to-noun* (*I want to a dog*). This suggests that learners go through a stage in which *want to* has a unitary status but the category after *want to* has not been fixed yet. I would like to apply usage-based models proposed by Tomsasello (2003) to second language acquisition and to demonstrate why such an ungrammatical pattern is possible during the second language development.

Keywords:　usage-based models, second language acquisition, constructions

1. はじめに

Dulay, Burt, and Krashen (1982)は、第二言語の習得者は母語にかかわらず、形態素の習得には普遍的な習得段階を主張し、様々な言語を母語とする実験参加者からその妥当性を証明している(図 1)。

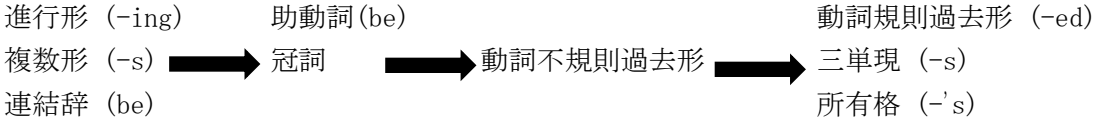

図１　第２言語習得の英語の普遍的な習得順序

横川（2006, 2009）は、英語の単語に着目し、日本人の英語学習者がどのくらい親しみがあるかという観点から、3,000 に及ぶ単語を 1 から 7 の段階で調査しリスト化した。以下に、単語を紙に書かれた状態の親密度トップ 10、音声で聞いた時の親密度トップ 10 をそれぞれ示す。

表１　親密度トップ 10（文字編）

親密度順位	単語	評定平均
1	no	6.92
1	you	6.92
3	one	6.91
4	play	6.89
5	music	6.88
6	after	6.87
6	go	6.87
6	world	6.87
9	good	6.86
10	time	6.85

（横川 2006: 169 に基づいて作成）

表２　親密度トップ 10（音声編）

親密度順位	単語	評定平均
1	music	6.98
2	hello	6.96
3	today	6.88
4	example	6.87
5	question	6.85
6	number	6.84
7	yes	6.83
8	teacher	6.82
9	good	6.81
10	good	6.81

（横川 2009: 167 に基づいて作成）

さらに横川（2006）では、英語学習者の意味を特定する反応時間を計測したところ、単語の親しみやすさが高く、かつ実際の使用頻度が高い語（BNC コーパスの頻度）が最も意味の正答率が高いことを明らかにしている。

本研究では、語彙の習得と形態素の習得との関連性を解明することを目標としているが、本論文では日本人大学生が書いた英語に基づいて単語の使い方に焦点を当てていく。今回の実験では *Oxford Reading Tree* の中から *A New Dog* のストーリーを日本語から英語に訳してもらい、複数回使用が期待される動詞 *want* に着目し、その使い方の特徴を吟味していく。横川（2006, 2009）の親密度調査によれば、*want* は文字編では 169 番に位置し評定平均は 6.49（1）、音声編では 97 番で評定平均は 6.50 という結果だった（2）。このことから、日本人の英語学習者にとって、*want* は親しみのある単語と言えよう。

（1）親密度順位（文字編）

1　　3　　169

{no, you} {one} ……{advice, control, cook, cup, eye, from, great, know, Monday, or, relax, sing, sound, teacher, want}

（2）親密度順位（音声編）

1　　2　　97

{play} {go} ……{abroad, chicken, Monday, never, radio, want, yourself}

今回の実験から「want to 名詞」というパターンが数多く観察された。Tomasello（2003）に代表される用法基盤モデルを第二言語習得に適用し、日本人英語学習者で見られた *want* の特徴を解明していく。

２．絵本を用いた実験（実験１）

２．１．実験方法

本実験には、日本人大学生（3 年生～4 年生）20 名に協力してもらった。TOEIC スコアは 200 点から 655 点の間で分布している。絵本は多読授業の教材として近年取り入れられるようになっており、その中でも *Oxford Reading Tree* シリーズは定評のある絵本である。本研究は多読やリーディングに焦点を当てたものではないが、容易にストーリーをイメージしながら書くことができるという観点から、*Oxford Reading Tree* シリーズを採用した。同シリーズはステージ 1 からステージ 9 まであるが、1 つの文が短く、基本的な語を用いれば書くことができるという点からステージ 2 を使用した。今回はステージ 2 の中から *A New Dog* を用いたが、この物語は 12 の文で構成されている。物語の内容は、ある家族が飼いたい犬を選び、気に入った犬を見つけて一緒に家に帰るという内容である。日本語については *Oxford Reading Tree* のユーザーズガイドに基づいて提示した。(3) が実験用紙に提示した日本語文である。便宜上、英文も明記するが、実験を行う際には英文は提示していない。

(3)

1. キッパー は犬が欲しかったです。
   Kipper wanted a dog.
2. みんなも犬が欲しかったです。
   Everyone wanted a dog.
3. 捨て犬の家へ行きました。
   They went to the dogs' home.
4. みんなで犬を見ました。
   They looked at the dogs.
5. キッパーはこの犬が欲しくなりました。
   Kipper wanted this dog.
6. ちょっと、大きすぎです。
   It was too big.
7. ビフはこの犬が欲しくなりました。
   Biff wanted this dog.
8. ちょっと、小さすぎです。
   It was too little.
9. ママはこの犬が欲しくなりました。
   Mum wanted this dog.
10. ちょっと、強すぎです。
    It was too strong.
11. みんな、この犬が気に入りました。
    Everyone liked this dog.
12. この犬を連れて帰りました。
    They took the dog home.

実験方法は、投野（2007）が中学生及び高校生に対して実施した方法に基づいて、以下のように定めた。

(4)　a. 実験の制限時間は 20 分。
　　b. 辞書の使用は認めない。
　　c. 単語が分からない場合は、その場所に日本語か該当する単語をカタカナで書く。（固有名詞などは実験用紙にあらかじめ明記しておいた（付録参照）。）

２．２．実験結果

オリジナルの絵本では、1 番目、2 番目、5 番目、7 番目、9 番目の 5 つの文で *want* が使用されていた（5）。

(5) a. Kipper wanted a dog.
b. Everyone wanted a dog.
c. Kipper wanted this dog.
d. Biff wanted this dog.
e. Mum wanted this dog.

このことから、日本人の実験参加者においてもかなりの高頻度で *want* が使用されると期待される。*want* は合計 91 回使用され、構文の観点から (6) に示す 3 つのタイプに分類する。

(6) タイプ A: want 名詞
タイプ B: want to 動詞
タイプ C: want to 名詞

論理的には「want 動詞 (*Kipper wanted get a dog*)」も可能であるが、今回のデータには該当例がなかった。本論文では便宜上、タイプ A、タイプ B、タイプ C という名称を用いていく。(7) に各タイプの代表例を記す。なお、(8) の 2 例については今回の分析から除外した。

(7) タイプ A: a. Kipper wanted a dog.
b. People wanted a dog.
タイプ B: a. Everyone also wanted to have it.
b. Kipper wanted to have the dog.
タイプ C: a. Kipper wanted to a dog.
b. We wanted to a dog.

(8) a. Kipper wants to want this dog.
b. Mam wants to want this dog.

タイプ別の集計結果を表に示す。

表 3 タイプ別にみた *want* の出現回数

タイプ A	タイプ B	タイプ C	合計
45 (51.7%)	14 (16.1%)	28 (32.2%)	87

A New Dog はすべて過去形でストーリーが展開されている。*want* の時制を見ると、それぞれのタイプには、以下のように原形もしくは現在形とみられるものも観察された。

(9) タイプ A: Biff <u>want</u> this dog.
Kipper <u>want</u> dog.
タイプ B: Kipper <u>want</u> to get this dog.

タイプ C: Kipper wants to this dog.
Everyone want to dog, too.

したがって、*want* の形が「過去形」または「そのほか」に基づいて各タイプをさらに分類していく。その結果が表 4 の通りである。

表 4　動詞の形に基づいた *want* の特徴

タイプ A		タイプ B		タイプ C		合計
過去形	そのほか	過去形	そのほか	過去形	そのほか	
28	17	11	3	8	20	87

３．考察

３．１．用法基盤モデル

Tomasello (2003)に代表される用法基盤モデルでは、子どもが言語を獲得するには言語体験によってボトムアップ式に徐々に言語が獲得されるとしている。言語習得の過程には以下の 4 つの段階があり、親などの周囲の発話に基づいて漸進的に抽象度が高まる。

(10) Holophrases (一語文)
Pivot schemas (軸語スキーマ)
Item-based constructions (語彙依拠構文)
Abstract constructions (抽象的な構文)

第 1 段階の「一語文」は 12 か月ごろに見られ、18 か月ごろになると 2 つの語が結合した「軸語スキーマ」という段階に入る。例えば、(11) を見てみよう。

(11) More _____.

この場合、*more* が軸語として機能し、下線部に語を挿入することにより第 1 段階より多様な表現が可能となる (more juice や more grapes など)。24 か月ごろになると「語彙依拠構文」の第 3 段階に入る。この段階になると、動詞ごとに語順や格などの統語標識が発話に反映される。そして、最終段階では個々の動詞ごとに構文が存在するのではなく、他の動詞と共有したより抽象度の高い構文が獲得される。

３．２．用法基盤モデルを用いた分析

本実験結果を用法基盤モデルに適用すると、図 2 に示すボトムアップの体系を仮定できる。

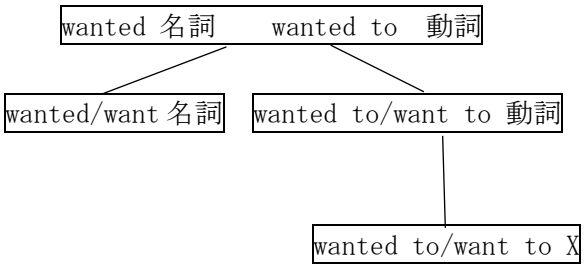

図 2　用法基盤モデルに基づいた *want* の獲得過程

一番下の「wanted to/want to X」を見てみよう。これは「want to」という軸語があり、X に要素を入れることが可能な「軸語スキーマ」対応した段階であるととらえることができる。Tomasello (2003)は「軸語スキーマ」の段階では統語的な標識はないと主張しているが、これに従えば、この段階では X には名詞も入ることも可能であり、そのため、タイプ C が産出されたと考えることができる。さらに、タイプ C では 28 例中 20 例（71%）が過去形を使用していないことからも、時制の面でも統語規則に縛られていないことが分かる。一つ上の段階になると「wanted to/want to 動詞」という「語彙依拠構文」の段階に進む。ここでは、X に入ることのできる範疇は「動詞」と指定されている。さらに、今回の実験では「want 動詞」というパターンは観察されなかったことから、範疇の指定ができるようになると、「want 名詞」も使用できるようになるとみられる。図 2 の最上部には「wanted 名詞、wanted to 動詞」が存在すると仮定する。これは、最終的な「抽象的な構文」に到達する前の段階で、コンテクストに応じた時制を適切に使用できる段階である。そして、他の様々な動詞と共有できるさらに抽象度が高い構文「主語+他動詞+目的語」「主語+他動詞+to 動詞」を獲得できると考えられる。

３．３．*want* 構文の親密度（実験 2）

本実験から、単に単語を知っているだけでなく、その単語を「構文」として適切にとらえているかどうかが重要であることが証明された。そこで、(12) の 4 つの各英文に対して、(13) に示す 5 つの段階で親密度を調査した。実験参加者は日本人大学生 1~2 年生の 42 名である。

(12) a. I want a dog.
　　b. I want to get a dog.
　　c. I want to a dog.
　　d. I want get a dog.

(13) 1. まったく馴染みがない。
　　2. あまり馴染みがない。
　　3. どちらとも言えない。
　　4. どちらかと言えば馴染みがある。
　　5. とても馴染みがある。

「まったく馴染みがない（1)」から「とても馴染みがある（5)」を数値化して合計したものが表 5 である。

表 5　*want* 構文の親密度

タイプ A	タイプ B	タイプ C	タイプ D	合計
130	134	129	106	499

タイプ A～タイプ C の合計点はほぼ同じで親密度に違いは見られなかった。実験 1 ではタイプ B とタイプ C の両方が観察されたことから、この 2 つの親密度が適切に識別できているのか確認した。今回は、タイプ B を「4 または 5」と判断しかつタイプ C を「1、2 または 3」と判断した参加者を確認したところ 10 名該当した。このタイプを便宜上「グループ I」とする。グループ I とそれ以外の 32 名（グループ II）に分けて、分析を試みた。なおそれ以外の 32 名とは、タイプ B とタイプ C の親密度が同レベル、またはタイプ C のほうがタイプ B よりも馴染みがあると判断した参加者が該当する。そして、この 2 つのグループがタイプ A とタイプ D をどのように判断したのか見てみよう。タイプ A が文法的なので、先ほどのタイプ B とタイプ C の親密度を確認した時と同様の手順で、タイプ A を「4 または 5」と判断しかつタイプ D を「1、2 または 3」と判断した参加者が何名該当するのか確認した。その結果、「want to」を適切に識別できるグループ I では「want 名詞」も適切に判断できた参加者が 10 人中 4 人（40%）だった。それに対して「want to」の構文が判断できていないグループ II は 32 名中 6 名（19%）が「want 名詞」を判断できたという結果が得られた。人数が少ないため今後の調査が必要になるが、「want to 動詞」構文を獲得できているか否が「want 名詞」構文の獲得にも影響を与えるのではないかとみられる。そのためには、「軸語スキーマ」の段階から「語彙依拠構文」の段階に進むことが重要である。Tomasello に従えば、抽象的な構文の構築には、トークン頻度とタイプ頻度のうち、タイプ頻度が寄与しているので、タイプ頻度をいかに高めるかが課題となるがこの点については今後の課題としていきたい。

４．まとめ

本論文では、動詞 *want* に焦点を当てて分析を行った。「want to」の後ろに名詞が観察された事例が観察されたことから、ボトムアップ式に構文が習得されると提案した。そして、Tomasello (2003)の第一言語習得て提唱された用法基盤モデルが第二言語習得においても適用可能であることを立証した。今後は、他の動詞についても日本人学習者の特徴を調査し、体系的なモデルを構築していきたいと考えている。

引用・参考文献

Dulay, Heidi, Burt, Marina, and Krashen Stephen (1982) *Language Two*. Oxford: Oxford University Press.

Gathercole, Virginia C. M. (ed.) (2009) *Routes to Language: Studies in Honor of Melissa Bowerman*.

New York: Psychology Press.
Hunt, Roderick, and Brychta, Alex (1986) A *New Dog* (Oxford Reading Tree: Stage 2). Oxford: Oxford University Press.
児玉一宏・野澤元（2009）『言語習得と用法基盤モデル』研究社.
鈴木孝明・白畑知彦（2012）『ことばの習得　母語獲得と第二言語習得』くろしお出版.
Tomasello, Michael 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
Tomasello, Michael/辻幸夫、野村益寛、出原健一、菅井三実、鍋島弘治郎、森吉直子（訳）（2008）『ことばをつくる』慶応義塾大学出版会.
投野由紀夫（編）（2007）『日本人中高生一万人の英語コーパス　中高生が書く英文の実態とその分析』小学館.
横川博一（編）（2006）『日本人英語学習者の英単語親密度　文字編：教育・研究のための第二言語データベース』くろしお出版.
横川博一（編）（2009）『日本人英語学習者の英単語親密度　音声編：教育・研究のための第二言語データベース』 くろしお出版.

付録

1～12 の文は、連続した一つのお話です。
日本語に合うように英語にしてください。
辞書は使わないで、わからないときは、その場所に日本語過疎の単語の発音をカタカナで書いてください。

これまでのあらすじ
キッパーとその家族は、新しい絵に引っ越しました。犬を飼うかどうか相談中です。

1. キッパー（Kipper)は犬が欲しかったです。

2. みんなも犬が欲しかったです。

3. 捨て犬の家へ行きました。捨て犬の家＝dog's home（飼い主が何らかの事情で飼えなくなり、新しい飼い主が見つかるまでの保護施設を指す）

4. みんなで犬を見ました。

5. キッパーはこの犬が欲しくなりました。

6. ちょっと、大きすぎです。

7. ビフ(Biff)はこの犬が欲しくなりました。

8. ちょっと、小さすぎです。

9. ママはこの犬が欲しくなりました。

10. ちょっと、強すぎです。

11. みんな、この犬が気に入りました。

12. この犬を連れて帰りました。